GR
白雲郷

とりゐ

29 昭和49年1月1日　宗教法人　鳥居観音

表紙の如来像説明

○ 納経塔内部の高さ４ｍの正面段上に**釈迦如来**を安置されて居ります。純インド式で総高2.5ｍの金箔仕上げです。

トーテンポール

○ 白雲山入口に、**白雲山観音パラダイス**と云う**トーテンポール**（10ｍ）が緑の中にそびえております。是はインドの名高いサンチーの門からヒントを得たもので、中央に観音二十八部衆の**風神、雷神**（各1.3ｍ）と頂上に、**からす天狗**（1.6ｍ）がのせてあります。

インド　サンチーの門

トーテンポール

とりゐ　第29号　1月1日発行

目次

表　紙　納経塔内の釈迦如来像　裏トーテンポールとサンチーの門
導光禅師御法話……（其の十二）……二
観音信仰について……（其の三）……小林高安…五
地球を救う寅歳……桐　江…八
新　年　互　礼（寄進者芳名）
西　遊　記……（其の二四）……一三
田　舎　医　者……（其の九）……見川鯛山…一七
鳥居観音だより……二一
裏表紙　鳥居観音案内図と諸行事のお知らせ

道光禅師（故高階瓏仙猊下）御法話

（其の十二）

こころのかがみ (2)

つまり六根は外界をとり入れる媒介者のような役目です。この媒介によって客観的外界の六境を、主観的六根がとり入れて、その六識のはたらきをおこすのです。すなわち、色境は眼根を通じて眼識をおこす。つまり六境が六根から入って六識をおこすのであります。

この六根と六識を合わせて十八界と申しております。これは我という認識をしているのでして、それを人我といっております。この組織的のほかに固定形の我というものはありません。したがってこの十八界も、実は因縁合成のもので、実体はなく仮りの姿にすぎません。それらは真理の本体の一切空のあらわれと説かれていまして、本来は空なのです。

この十八界の仮りの集合体の人我はもちろん、それを組織している十八界を法我という、その法我さえも否定するのです。そこのところを人法二空というのです。これで真理の本体の真空を一応お話しいたしました。つぎに十二因縁も否定します。

無無明亦無無明尽。乃至無老死亦無老死尽。

「無明もなく、亦無明の尽くることもなく、乃至老死もなく、亦老死の尽くることもなし」とよみます。

前段では我の実態をあきらかにして、その人我の空なることを示し、法についても法我も空なることを示されたものです。よってこの段では、さらに十二因縁について、これも真空の本体にはないことを示されたのであります。仏教では我体の存続を説くのに十二因縁を説きますが、ここではその十二因縁の第一の無明と最後の老死とをあげて、中間は略してあります。今は細説を略しますが、人間が生まれ

る根本を無明といっています。すなわち真理の本体にさめざる迷いの本をいいます。そこから惑業といって、真理にそむいた行きかたをおこす。それを行（ぎょう）といって無明のつぎにあげてあります。そういうように、その十二とおりの因縁のつながりによって、人間は生死の連続があるというのです。その無明という迷いの世界に発しているから、老死の苦患があるので、反対に根本の無明の迷いの闇をさませば、乃至（乃至は中間を略すこと）老死に対するとらわれがなくなります。十二因縁に順と逆とがありますが、そうしたことも真空（数物的なからっぽの意でない）の場合には一切ないのであります。

無苦集滅道、無智亦無得以無所得故。

「苦集滅道もなく、智もまた得もなし、所得なきを以てこの故に」と読みます。

仏教ではこの人の世の姿を、「苦」の世界としてあります。その迷いをなくした悟りの世界にいたったときを「滅」といい、その滅に達する仏道の教えを「道」といい、それを「苦集滅道の四諦」と申しております。苦は迷いの結果、集は迷いの原因、滅は悟った結果、道は悟りの原因であります。

しかるに観世音菩薩の深く大智慧を行じた見地からすれば、この苦集滅道さえもない、さとる智慧も、さとられる涅槃（さとり）もないのであります。絶対空を示す真理の場合には、存在さえもいわないと喝破されたのであります。それは「無所得の故に」とあります。これは「有所得」に対することばであります。たとえば、大海の波がいっさい消えたようなもので、波は水の動く姿で相対世界であります。波の消えたときが、水の平等な本体であるように、この般若はその平等本体であります。ゆえにここからみるとき波の姿の差別はいっさい否定されるのであります。

あらゆる動く世界のなかでも、私ども凡人の行為はとくに有所得で、働けば金になる、こうすれば褒められる。そうでなかったらストライキをおこす、腹を立てる。なぐる、ということにもなるのです。

しかるに真理に活動している太陽の光や、空気は、人間からお礼一ついわれないのに、世界を照らし、生物を生息させてくれています。それと同じように絶対平等の真理である深般若の皆空のところには、いっさいの波動も見せない。迷いも悟りもないのであります。よって真理の本体も、この大海の静かなる平面のようなものであると示されているのです。そこで次の真理の悟りの心境を、

菩提薩多依般若波羅密多故。心無罣礙、無罣礙故無有恐怖。

「菩提薩多は般若波羅密多によるが故に、心に罣礙なし、罣礙無き故に恐怖あることなし」と読む。

菩提薩多とは菩薩のことで、この菩薩はこの般若波羅密多の大智慧によって、我空法空の甚深微妙の真空の妙理に達しておられますので、無所得であるから心に罣礙(さしさわり)するものがないのです。つまり虚心胆懐で、さえぎるものなく、自由自在で、わだかまりもありません。故に恐怖もないのです。

遠離一切顚倒夢想。究竟涅槃

「一切の顚倒夢想を遠離して涅槃を究竟す」と読みます。人間のものの見かたは、常に自己本位でまちがったことが多く、なかにも四顚倒といって、全く逆にみていることが四つあるといわれております。第一は常顚倒、第二は楽顚倒、第三は我顚倒、第四は浄顚倒であります。第一は世の中は変転きわまりないのに、いつまでも変わらぬという思いをしている。第二はこの世は苦であるに、目さきの享楽に迷って、うかうかと暮している。第三は十二因縁によって仮りに生まれている自分に、自我の執着をして我執慢心をしている。第四は世の中の人間は一皮むけばみにくい不浄なものであるのに、若い男女の青春時代のごときは、とくに浄い美しい身であるかのように錯覚している。この四つのほかにも、いろいろと世の中をさかさまに考えていることが多いのであります。ところがこの顚倒や夢想からはなれることが出来るのです。

以下次号

観音信仰について（其の三）

小林高安

年頭にあたって

明けましてお目出度う存じます。

今年も好い歳をお過しいただきますよう元旦から初祈禱を修行し、ご信者各位のご安泰とご繁栄をご祈念申し上げ観音信仰による幸福招来の要訣を申し述べて年頭のご挨拶といたします。

合掌

今回は父母恩重経のお話しは次号に廻しましたので専ら観音信仰者の心構えについての所見を述べることにいたしました。

人は誰彼の区別なく幸せを願いよりよい人生を送りたいと云う共通の願望がありますが、唯希望や理想だけでは問題の解決は得られません、吾々が旅をする時にも予め目的地を定めてその道筋を心得て出掛けないと不安を伴います随って楽しい旅もできません。そこで私達は人生の長旅をどのような心構えで行けば安心して、日々を好日として目的を達せられるかは人任せでなく自分で道筋を承知して行くことは大切なことであります。

そこに有難いことに、お釈迦さまは長い人生のご体験の中から皆が幸せになるには途中の障碍をどのように克服して前進することができるかを最も判り易くお説きになっております、仏の教えこそ幾千年経た今も変らぬ真理であることは観音経にあります。

宗教は信ずることが基本であり、その教えを素直に実践してこそ価値があり又成果が得られます。

人にはそれぞれ因縁も異り、願望の相違はありますが、観世音は大慈大悲の自在神通力の眼をもって、衆生の心の総てを把握して所謂千手千眼のみ手を差しのべて援助を与え願望成就にお導き下さるそのことを「観音妙智力・能救世間苦」云うのであります。

それでは頼みさえすれば何んでもきき届けられるのかと、それは無理ではありますまいか、なぜならば

例えて申しますと、お金の必要なときに、観音さま私は金がなくて困ってますから金を下さいと云っても、ああそうかとお出しはならないが、自在神通力でその金の使い途の正邪を見通して金策の方途を得させる道を開いて下さるが本人はあくまで真実をもって金策に努力するは当然であります。

神仏には正直な真心をもって対する人には惑応道交と申しまして神仏のみ心に通ずる道が開けます。

信仰の道は転転開かれておりますが入門できるか否かは自分にあることを覚悟しなければなりません。

信仰の道は飽まで正しい道を選ぶは主要な条件であって間違った場合目的を達することができません。

古歌に「わけのぼる、ふもとのみちは、おおけれど、おなじたかねの、つきをみるかな」月の見える道を選ばねばなりません。

信仰は拝む対象に誠意を尽して誓約することでありその約束を破ることは自分を見捨てることである。

次に誓約の内容とは私は、あなたを信じ、あなたに教えを守り三毒五欲に煩わされない道を歩み、自他の利益に合致する有意義な人生の送れる人になることを誓います、勿論心の誓いであります。

さてその悩みの根元とは何かを箇条で示しますと、次の通りであります。

三毒＝一、貪欲（どんよく）、二、嗔恚（しんい）、三、愚痴（ぐち）の三つであり

一、貪欲＝もさぼり、限りない欲深いこと。

人には生活上いろいろの欲がありますが分不相な欲は慎まないと自ら欲に溺れて身の破滅を招く結果となるから充分な自制自誡が肝要である。

二、嗔恚＝いかり、腹を立てること。

人はささいなことでも思うに任せぬと面白くないと考えがちである、その程度で収まればよいが、つのるとカッカして逆上状態となり飛んだ間違いを起し易いことは毎日の報道が証明しております、例えば交通事故の場合前の車より先に走りたい欲からであります。

腹をたてて円満な問題解決の途はありえないことを、反省すべきであります。

三、愚痴＝これは心の病で闇愚の意である。
人は自分は賢いとか何とか自負する気持が大なり小なり存在する、そのことは我の元であり、我を主張するところに物事の正邪の判断を誤まる結果となる。
釈尊は愚痴について、人には万事を心得て正確に判断する力に欠ける点があり、諸事に行届くことは不充分な点がある、それは愚痴であると示されたのであって普通に云う年をとったから、若いからないと云うことでなく老若に共通して存在する問題であると申されたのである。
以上の三つが不幸の生ずる根元であるからこの三つを「貪嗔痴」の三毒と云うのであります。私達にこの恐るべき毒素に対し日夜警戒を怠らないようにと教示されたのであります。
欲を五つに分類して説いてありますその五欲を項目にあげて略説します。
一、財欲＝財宝物に対する欲を云う。
物欲も度を過すと嘘をつく、人をだます、危害を与え結果は身の破滅を招くこととなる。
二、色欲＝色事も過度は慎むべきで心身をそこなう許りで在諸苦を生じ身の破滅となる。
三、食欲＝飲食物に対する欲で暴飲暴食は病気の元である、腹八分に医者いらずとも云う。
四、名欲＝名誉や置位を欲しがることで柄にないのぞみで身を誤まる例は多いのである。
五、睡欲＝眠ることの欲を云う、人は適度な睡眠は当然であるが毎日行うべきことを怠けたり、遊び過ぎて眠るなどは惰眠と云って最もよくないことで苦の素を育てるにひとしい。
以上で三毒、五欲を略説しましたが簡単なことのようであって実行となるとそうでないところに精神的な支えとして宗教の必要があり、そこに観音経に示された通り人間生活にはなくてはならない教であると確信して観音信仰をおすすめする次第でありますから、毎日の生活の中に取入れて自分のものとしてよりよき人生を生きぬいていただくことを念じておわります。

地球を救う寅歳

桐江

新年おめでとうございます

本年は「千里行って　千里帰る」と言われる寅歳でありますのでこれにちなんで、所感を書きます。

日本の現状と将来

池田内閣の、スローガンであった、産業優先の政策によって、日本の産業の発展は、世界の驚異の的となりました。併し之は、資源を総て諸外国に頼っているまことに、あぶない橋を渡っているのです。

中近東が、石油の値上げや、輸出減を発表すると原油七〇％を産出している米国でさえ、消費節減にふみきりました。況や原油のない日本は、非常な問題として消費節減の断行をせねばならず、僅かな石炭資源で、原子力エネルギー時代迄の、つなぎをせねばならぬだろうとの事です。

大東亜戦前に、日本が、米、英、ソの三国干渉により経済封鎖された時、日本は、手をこまぬいて自滅するか、破れても戦うかの瀬戸際に立たされて、遂に、大東亜戦争に突入した事を考えますと、今後何十年かの間に、世界に大異変が起らぬと、誰が断言出来ましょう。

其時にこそ、総ての資源を外国に依存して、風船玉の様な、日本産業経済は、一とたまりもなく、パンクして大東亜戦後のような耐乏生活をせねばならぬようになるのではないかと、憂慮にたえません。

物価高に於ても、産業戦に於ても、又それによる公害に於ても、世界一と云う、烙印を押されて居る

日本の将来は、誠に寒心に堪えません。

私は数年前「ケチな私」と題した文を或る雑誌にのせたことがあります。当時は生産者、販売業者が製品を消化する必要上「消費美徳」の宣伝をして、国民を煽って居りますし、消費者も使い捨てをするのを当然と考へている時代でしたので、私は悪徳者のような批判を受けた事があります。

ところが最近は紙類一つを見ても、原料不足で大きなショックを受けております。

又大都市のゴミ戦争も深刻なものですが、各家庭でケチケチ運動を徹底して、ゴミを道徳的に処理すれば、ゴミは半減するでしょう。

このように「消費美徳」の弊害は、遂に消費者否国民全部に苦痛を与えているのです。

之には先づ、人間優先、道徳の高揚に、官民一致して努力し、原料を外国に依存しながらアニマル的激戦をして居る産業人をして現在の線にくい止めて一大転換をなさねばなりませんが、これこそ寅歳に与えられたる大使命でありましょう。

併し公害をまきちらし、道路を独占している自動車の自粛を強行した場合には、タイヤや各種部分品のメーカーに大きなショックを与える事を考えても産業を現在の線で、くい止めるだけでも非常な決意が要求されますが、如何なる困難があっても利潤主義の日本産業優先をおさえて、人間尊重第一主義、に大転換せねばならぬ事は、日本民族に課せられた重大な義務である事を、認識せねばならぬと思います。

日本唯一の海洋資源増強

日本のような資源の少ない国で、ただ一つ与えられたものは広大なる海洋で、蛋白資源を供給する、一大宝庫であります。

ところが、海洋汚染と、濫獲により、日本近海は荒果て、海産物の総てを諸外国から輸入していると云う、なさけない状態にあります。

北海道の釧路で、鰊を乱獲して、遂に根絶せしめて、一時成金の網元が自滅のうき目を見た事や、北

洋漁業でも南洋捕鯨でも、日本人は将来を考へず乱獲を強要したりしまして、遂には、世界の海洋国沿岸から、締出しをくっていると云う。将来を考えぬアニマル経済餓鬼的な性格があります。

日本では、先づ瀬戸内海のような小さな所を生簀(いけす)にせず、日本近海全部を生簀と考えて、強力な政策を講じたら、南洋未開発国の海のように、魚族が豊富になり、日本の食糧事情も日本の近海により豊にする事が出来ると思います。

たとへば昨年、秋刀魚が取れ過ぎた時、この魚獲を中止した事は魚族保護に役立った様になったと思います。

寅歳を転機として
日本民族の良い伝統に帰れ

婦人団体が物価引下げや、ケチケチ運動に努力して頂いている事は感謝に堪えませんが、国民全部が之に協力しなければ、この実現は困難です。

併し之を実現するには、忘れられつつある昔ながらのよい伝統を生かして、人間性豊かな民族に先づ切りかえる様、官民一致、殊に教育者が努力すべきです。

十二支は、日本人に行きわたっている信仰でありまして、寅年は「千里行って千里帰る」と言われておりますので、本年こそ、物質万能から、人間優先の楽しい国民生活に切りかえるに最もふさわしい年である事を、認識して頂き度いものです。

末期症状の地球

御承知の通り地球は益々狭くなりつつあります。

中国の原子爆弾の灰は、日本をおびやかしますしスエーデンには、黒い雪が降ると言われます。

又中近東の石油の減産と値上げにより、世界にショックを与えております。

殊に日本は、石油を全部輸入に頼っておりますので全くあわてふためいて買いだめ等、之が対策に右往左往している有様は、丁度地獄絵巻を地で見るような見苦しさを露呈しておりまして、資源のない日

本の悲しさを痛感します。

又、世界の人口の増加は、数十年後には数倍になり、地球上に氾濫する事になるとの事です。

ところが回教や、ヒンズー教等は、子供は神から授ったのだから、産児制限などすると罰があたると言っているように、人口の増加を制限する事はなかなか困難な事のようです。そのため人口増加により地球上が行きづまれば人間を大虐殺せねば、おさまらぬようになると云われております。

其の理由は限られた地球上に於ては、この人間を養う食糧の生産は、不可能である事から大飢饉となって人が餓死するとか、又民族保全のため戦争による殺戮とか、天変地変が起る等、云われております。

数万年前の、マンモス等のような巨大な動物が死滅したのは、あながち氷河とか、気候ばかりでなく大きな体を養うべき食糧の、歯朶等が不足した事も原因の一つでしょう。

このように歴史はくりかえされます事は、エジプトや中近東の砂漠の中には、数千年前の都市等の廃虚が沢山ありますが、この砂漠も昔は、ジャングルに覆われた気候のよい、沃野だったのでしょう。

トルコのトレドの遺跡の如きは、数千年の間に、八階もの市街地が重なっている事が発掘でわかった如く、各層の住民は、死滅か、移動をしたので土地は全く破壊しっぱなしで、砂漠となるのは当然と云えましょう。

エジプトの如きは国土の九五%は砂漠で、僅か五%がナイル河の両岸で、人口稠蜜なみじめな生活をしているのです。

水資源の豊富だと言われた日本でさえ最近は水不足をなげいているし、又地下水の汲上げで地盤が沈下しつつありますし地上も文化に侵蝕せられて、緑の国土が漸時破壊されつつある現状です。

このように人間は、かけがえのない地球を穴だらけにしたり、しわだらけにしたり、汚染公害を益々増加させて最後には、火星や月の如く全く砂漠に導き、人類を滅亡せしむるような原因を造りつつある恐るべき動物でありまして、今にして之を是正しな

かったら、臍をかむ事になるでしょう。
新年匆々、縁起でもない事を書いたと思われますが、虎歳により一大転換をなし得れば芽出度い事です。

地球愛護の平和観音

以上略記しました如く資源を世界に頼っている日本民族は、世界人類に卒先して、地球を愛護して極楽浄土に導くよう努力する事こそ現代の日本人に対し虎歳に課せられた大責任であると存じます。
私はその一環として、白雲山鳥居観音の、奥の院上の見晴台に、地球儀に乗られた平和観音を建立する事を決意して昨年十月、三信工業と工事契約を致しましたので本年末には完成の予定です。
そして平和観音が御手に持って居られる壺から、甘露の霊水を地球に注いで、地球の安全保持と人類をして永遠の平和な楽土に導いて頂くよう、今から祈願して止みません。

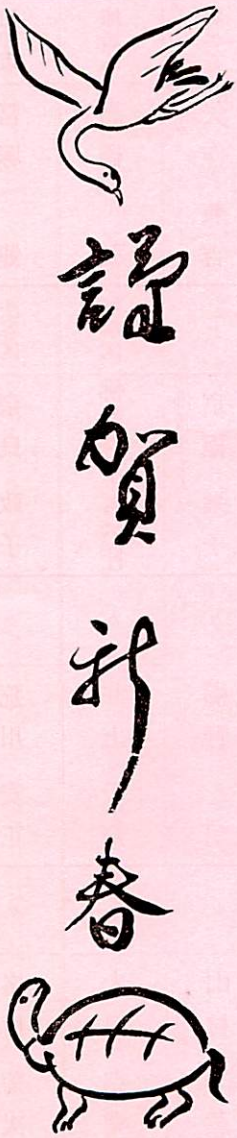
合　掌

（四十八年十一月初旬草稿）

新寿雑詠

岡部千昭

観音の慈顔浮き立ち初明り
参道をふむ足音や初もうで
信仰の栄えて安し国の春
只々に生きる仕合わせ雑煮食う
手作りの野菜も供え鏡餅
買いだめをせぬと誓いて初鏡
節約の予定も立ちて初笑い
健康の再出発や初歩るき
鶯の初餌に若菜摘んで来し
一年の計うち樹てん初ごよみ



新宿区	〃	〃	〃	〃
オリエンタル写真工業㈱ 社長 黒川倉好	専務 菊地虎雄	〃 小沢辰雄	取締役 中山誠一	〃 青山正道
新宿区	〃	〃	〃	〃
〃 田島大三	〃 江藤三喜男	〃 堀清	〃 大畠周作	〃 坂上尚男
新宿区	〃	〃	〃	〃
監査役 菊地友雄	〃 河野健夫	加藤久夫	安達浩	新津港
大田区	世田谷	〃	〃	大田区
国際興業㈱ 長澤良	〃 小佐野定彦	〃 高岡良男	〃 中島寿秀	〃 小西合三

川口市	国際興業㈱ 田口 力	浦和市	北山 武敏 〃	中央区	不二サッシ工業㈱ 佐野 友二	中央区	不二サッシ工業㈱ 飯塚 由利
板橋区	志鎌 登 〃	川口市	臼田 祐蔵 〃	〃	下村 彌一 〃	〃	中川 敏雄 〃
横浜市	渋谷 正二 〃	鳩ヶ谷	稲垣 美智夫 〃	〃	工藤 侃 〃	〃	小松 茂雄 〃
〃	金子 光利 〃	浦和市	武州印刷㈱ 藤沢 帝	〃	岩本 光一 〃	〃	有泉 四郎 〃
志木市	砂岡 箕三 〃	〃	藤沢 やす子 〃	〃	中島 操 〃	〃	小島 卯一良 〃
浦和市	冨塚 健 〃	渋谷区	女性佛教 奈良 政子	〃	荒川 安正 〃	〃	峯村 菊次 〃
練馬区	高橋 弘 〃	新宿区	佛教タイムス社	〃	井上 千寿 〃	〃	米田 克堯 〃
鳩ヶ谷	矢作 兼吉 〃	〃	佛教タイムス 京極 栄子	〃	櫛野 明 〃	〃	山村 薫 〃

中央区	不二サッシ工業㈱ 金沢 広	〃 小島 年光	〃 杵村 博	〃 滝之入 精司	〃 村田 俊一	〃 田部 直志	〃 吉岡 典男	〃 阿部 登
中央区	不二サッシ工業㈱ 年代 茂	港区 富士倉庫運輸㈱ 社長 前田 安彦	〃 専務 高木 菊蔵	〃 常務 川島 源次郎	〃 清水 喜久雄	〃 滝沢 弘	〃 取締役 網野 久一	〃 常任監査役 廣住 温
港区	日本火災海上保険㈱ 会長 吉永 武男	〃 社長 右近 保太郎	〃 副社長 松下 彦一	〃 専務 松下 権一	〃 佐々木文三郎	〃 常務 鈴木 進吉郎	〃 西山 秋二	〃 水口 憲夫
港区	日本火災海上保険㈱ 常務 斎藤 達	〃 渡辺 徳三郎	秩父市 ㈱小池製材所 社長 小池 清	杉並区 東洋ハウジング㈱ 山名 酒喜男	浦和市 福田 富一	世田谷 二宮 謙三	大宮市 大高 義賢	板橋区 古郡 繁次

松戸市	東洋ハウジング㈱ 近藤春義	中央区	大栄不動産㈱ 常務 原藤春雄	中央区	大阪市	浦和市	名古屋
福生市	〃 田村治平	〃	〃 杉山義喜	取締役 室田由雄	大阪支店長 大矢守蔵	浦和支店長 會川達雄	名古屋支店長 高瀬亀喜
中央区	大栄不動産㈱ 会長 大川鉄雄	〃	〃	〃	〃	中央区	〃
〃	社長 桐木光三	〃	〃 森川茂男	〃	部長 赤羽暁	〃	〃
〃	〃	〃	〃	部長 福田善昭	〃	横浜市	横浜支店長 長岡利重
〃	専務 今津政雄	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃 斉藤善政	〃	〃 山本博男	〃	大栄管理㈱ 常務 沖田忠	新宿区	〃
〃	常務 木村信	〃	〃 長谷川正男	〃	〃	〃	〃 柴山新之助
〃	〃 島田森雄	〃	〃 古筆丈文	〃	取締役 榊伝蔵	〃	〃
新宿区	大栄管理㈱ 取締役 名倉順一郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	監査役 吉田憲太郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃
中央区	東光電気工事㈱ 杉山愼	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃 桜田久	〃	〃 松本福夫	〃	〃 中村実	〃	〃 玉田勝太郎
〃	〃 山本泉	〃	〃	〃	〃	〃	〃

中央区	東光電気工事㈱	小川 孝重	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	与野 敏夫	〃	神崎 丈二	〃	黒川 清雄	〃
渋谷区	東海鋼業㈱	喜代永 政雄	〃	堀 宗一	〃	杉並区	北九州
岩本 浪雄	〃	二亦 正	〃	大田区	北九州	吉川 丞一	東海鋼業㈱
〃	中村 正隆	〃	中野区	夏秋 尚平	〃	斉藤 正三郎	〃
板橋区	中野区	古賀 浩	〃	杉並区	奥山 正夫	〃	加藤 真一
鎌倉市	小糸製作所㈱	小糸 源六郎	静岡市	杉並区	沼津市	清水市	世田谷
横浜市	品川区	清水市	小糸製作所㈱	大嶽 孝夫	〃	柴田 衞	〃
大嶽 俊郎	〃	島田 規矩雄	〃	須山 正秀	〃	加藤 順介	〃
中島 四十八	〃	玉井 謙三	〃	三鷹市	浦和市	川越市	所沢市
渋谷区	〃	浦和市	大宮市	日本光電工業㈱	荻野 義夫	〃	井原 隆一
〃	浜野 清吉	〃	岸上 丘	〃	渡辺 綱雄	西村 猛男	武州商事㈱
矢島 武久	〃	山崎 文男					

新宿区	武州商事㈱ 榊原 惣一	横浜市	〃 本島 茂	〃	〃 柳沢 金公	目黒区	〃 内村 葆
青梅市	武州商事㈱ 久保 一三	練馬区	〃 植松 正行	立川市	〃 御沢 正治	鴻巣市	〃 小川 和夫
世田谷	高田 与志子	台東区	浜田商店	船橋市	〃	〃	〃
船橋市	〃	中央区	船橋ヘルスセンター 山根 春衛	〃	大庭 英男	〃	大木 清二
船橋市	船橋ヘルスセンター 二宮 謙三	〃	中井 養一	日研化学株式会社	〃 滝澤 秀夫	〃	松本 弘道
本庄市	〃 小林 竹雄	熊谷市	〃 細井 広太郎	横浜市	〃 丸山 建二	青梅市	〃 杉浦 政雄
練馬区	山口 貴美子	新宿区	上田 花子	渋谷区	山口 奈可	川口市	〃 宮崎 年正
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
渋谷区	〃 山田 喜志夫	練馬区	〃 高山 重郎	千代田	〃 松本 四郎	〃	〃 大木 清二
地産㈱	竹井 博友	津村 幸代	トヨタ自販㈱ 社長 神谷 正太郎		松本 弘道		

港区	福徴講 新妻治郎	川口市	飯塚孝司	板橋区	榎本みや子	川越市	染谷清四郎
〃	川口市 大野元美	〃	寺門清志	〃	牛山新一郎	浦和市	向山実
熊谷市	町田長作	杉並区	(株)三信工業 社長 服部雄太郎	所沢市	専務 〃 服部雄次	府中市	常務 〃 山本一雄
中央区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
埼玉銀行	長島恭助	〃	松平忠晃	〃	大木恒四郎	〃	福原弘

川口市	大泉寛三	文京区	松本元	与野市	中村弥太郎	川口市	矢作はつ代
大宮市	山脇元助	〃	永瀬里代	川口市	〃 〃 古目谷弘	東村山	〃
稲城市	監査役 〃 白山暁	江戸川	千葉営業所 所長 宮木亨	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃 松本五良策	〃	〃 尼崎謙一	〃	〃 堀込聰夫	〃	〃

〃	永瀬孝直	浦和市	宮本正次
中央区	埼玉銀行 石坂泰三	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃 持田高良	〃	〃

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央区
伊地知重威 〃	青木良輔 〃	小倉一郎 〃	山本俊雄 〃	永田武彦 〃	熊谷保 〃	持木豊 〃	埼玉銀行 新藤義雄
〃	〃	〃	練馬区	〃	〃	〃	中央区
横澤宣行	横澤正明	深野文吉	横澤まつ	井原隆一 〃	大沢雄一 〃	掘越一郎 〃	埼玉銀行 柳田正夫
蓮田市	浦和市	八王子	〃	三鷹市	〃	〃	練馬区
新井義男	小澤恒介	阿部末吉	渡辺豊	渡辺八重	平沼精一	平沼敏子	平沼杉之助
〃	〃	中央区	杉並区	新宿区	熊谷市	岩槻市	草加市
丸山幸一 専務 〃	高木正一 副社長 〃	前田増三 蛇目ミシン工業㈱ 社長	竹村吉右衛門 社長 〃	安田生命保険相互会社	山口素	中田靱男	加藤昭

中央区	蛇目ミシン工業㈱ 常務	中村 静夫
〃	〃	長田 正光
〃	〃	内島 達爾
〃	〃	小宮山 宇一
〃	〃	斉藤 悟
〃	取締役	田宮 由道
〃	〃	富田 澄
〃	〃	田中 義一

中央区	蛇目ミシン工業㈱ 取締役	斉藤 文平
〃	〃	奥村 正巳
〃	〃	吉野 幸男
〃	相談役	嶋田 卓彌
〃	東京銀座三笠会館 社長	谷善之亟
〃	専務	谷善樹
〃	西銀座デパート㈱	
〃	スキヤ橋ショッピングセンター㈱	

五日市町	鈴木嘉三	世田谷
浦和市	藤沢秀夫	文京区
〃	横堀昇	豊島区
〃	大久保忠示	新宿区
〃	小早瀬宣昌	千代田
〃	北原庄三	世田谷
〃	鈴木健一	新宿区
坂戸町	平井敏治	横浜市
中野区	舘野慶次	杉並区
杉並区	高島史路	草加市
府中市	久満光樹	狭山市
三鷹市	久原良彦	藤沢市
国分寺市	佐藤正夫	〃
目黒区	山崎孝	三郷市
川崎市	押渡部武久	町田市
東久留米	山本スギ	藤沢市

船口暉子	
島田喜久子	
来馬秋子	
中田和子	
高橋つね	
西沢はる	
北川教全	
寺師正一	
高橋一郎	
麦倉忠彦	
岡田和夫	
新川宣和	
本木幹彦	
武石次男	
塩治寛次	
宇佐美誠	

練馬区	後藤 英男	江東区	玉江 知恵子	川越市	川上 善之助	大宮市	宍戸 紀一
足立区	清水 雄次	足立区	大森 譲子	〃	熊本 潔	熊谷市	内藤 博之
藤沢市	堀 豊泰	江戸川	石上 延治	上尾市	兵頭 睦雄	加須市	樋口 智
飯能市	小林 頼四	葛飾区	江端 政吉	岩槻市	吉田 兵蔵	吉見町	新井 和明
練馬区	柴田 務	〃	江端 せん	上尾市	柴崎 昌夫	大宮市	佐藤 昇治
〃	甲賀 寿男	千代田	大橋 朝次	飯能市	平松 正吉	与野市	青木 博
〃	矢島 重五郎	港区	綿貫 次郎	浦和市	中村 英夫	上尾市	鍋谷 清志
〃	永沢 敏男	市川市	鈴木 堅之	飯能市	加藤 育三	川口市	新田 豊
〃	上野 広治	荒川区	丸本 ひさ江	大宮市	田中 一男	大宮市	黒田 明
北区	金子 徳治	北区	山本 すみ子	飯能市	梶谷 真一	浦和市	中村 正夫
〃	佐久間 眞治	〃	生田目 盛三	熊谷市	長谷川 栄二	野木町	中田 貞夫
〃	山本 宗平	坂戸町	若松 志津	浦和市	宮野 孝	川口市	小林 文久
豊島区	安藤 久次郎	川越市	森田 角三郎	〃	花木 孝	〃	鶴田 昌保
板橋区	長谷川 美沙	〃	原田 愛助	大宮市	沢田 実	浦和市	中野 政孝
江戸川	栗山 六之助	杉並区	栗原 通任	鴻巣市	川嶋 久幸	鳩ヶ谷	松本 忠
文京区	熊倉 ミツ子	川越市	長田 謙	春日部	竹村 寛	羽生市	岡田 孝徳

大宮市	常見 武男
栗橋町	白井 一郎
行田市	島田 友五郎
吹上町	関口 四郎
川口市	富田 文男
大宮市	川野 博通
白岡町	加藤 洋治
川越市	横関 良雄
〃	山岡 一雄
坂戸町	三條 秀男
川越市	牛窪 宏治
川島町	長谷川 清
坂戸町	沢田 仁司
小川町	清水 英明
坂戸町	中島 健
所沢市	安田 正吉
東松山	新井 忠好
坂戸町	武田 剛
川越市	小峰 昇
飯能市	内田 政治
坂戸町	岸 佐京
日高町	眞野 信治
川越市	関 賢寿
坂戸町	田中 耕作
入間市	小澤 華一
川越市	荒井 安雄
〃	金野 裕
〃	斉藤 勝則
大宮市	武田 安弘
東松山	新井 茂
川越市	池田 実
飯能市	清水 利男
白岡町	大久保 良一
行田市	渋沢 修
幸手町	竹内 茂
羽生市	斉藤 鼎
加須市	島崎 隆雄
菖蒲町	福井 精治
羽生市	奥沢 雅夫
大利根	小林 昇
北川辺	増田 文義
羽生市	柿沼 和夫
猿島郡	藤沼 和美
北川辺	荒山 五男
上尾市	大滝 孝
北本市	芳村 寿久
〃	小沢 俊勝
〃	石田 征司
鴻巣市	加藤 丈夫
行田市	中島 寛亮
大宮市	竹村 将
上尾市	新井 節夫
鴻巣市	荒井 忍
浦和市	宍戸 忠治
大宮市	黒須 達児
飯能市	高野 昌保
大宮市	浪江 和夫
浦和市	吉田 明徳
川越市	栗原 栄
浦和市	高橋 智
〃	比留間 豊夫
吹上町	根岸 栄一
川口市	青木 宏夫
大宮市	高瀬 紀

毛呂山	吉田	義孝
大宮市	渡辺	尚宣
白岡町	松本	義勝
宮代町	佐藤	圭助
上尾市	堀田	博光
春日部	渡辺	友次
庄和町	前島	進
三郷市	宮内	弥八
川口市	小野	民雄
八潮市	勢理客	雄
鷲宮町	渡辺	久雄
越谷市	橋本	新一
浦和市	平石	博勇
春日部	寺崎	猛
岩槻市	伊藤	雄一
幸手町	中田	岩雄
関宿町	中村	吉継
八潮町	関	留義
東松山	千原	元
大宮市	天海	秀夫
新宿区	山澤	隆一
上尾市	大川	長信
熊谷市	茂木	晋二
〃	手嶋	照晃
羽生市	増田	貞夫
飯能市	柏崎	昌平
加須市	松本	敏雄
日高町	嶋田	保
岩槻市	古田	勝蔵
大宮市	落合	隆二
入間市	大矢	浩平
飯能市	青木	邦雄
入間市	宮岡	光男
〃	原田	正美
〃	古谷田	静男
〃	石川	昌平
〃	浜野	博己
名栗村	中村	馨
飯能市	加藤	秀雄
日高町	大川戸	要吉
飯能市	浅見	一雄
〃	平	孝男
〃	野口	元司
日高町	大川戸	岩夫
入間市	河野	政男
所沢市	藤野	隆
毋士見	青木	哲美
大宮市	小池	康夫
川越市	木内	通夫
所沢市	吉田	猛
川越市	佐竹	幸夫
富士見	石井	三四
浦和市	古沢	修
大宮市	本橋	秋雄
上尾市	柳	正夫
大宮市	鍛屋	正次
〃	五十嵐	稔
与野市	天野	富雄
浦和市	高野	貞夫
上尾市	安藤	延男
吹上町	稲沢	吉春
大宮市	斉藤	弘
与野市	山田	和国
北本市	松本	博

岩槻市	田口　豊
加須市	新井　洋
熊谷市	富田　邦夫
寄居町	保泉　敏夫
本庄市	田口　次作
熊谷市	橋本　正勝
児玉町	小茂田　富雄
〃	根岸　雅夫
北本市	佐藤　政之
川口市	福田　敏彦
庄和町	吉田　富広
久喜市	岡安　健二
大宮市	間庭　正二
菖蒲町	松本　晃
古河市	和久　哲夫
白岡町	斉藤　幹雄

熊谷市	佐藤　寿夫
加須市	加藤　清正
熊谷市	猪野　一夫
〃	佐藤　喜三郎
東松山	栗原　利男
行田市	諸貫　忠久
大宮市	望月　盛隆
加須市	酒井　吉彦
児玉町	茂木　俊雄
熊谷市	福原　政明
南河原	中野　一郎
鴻巣市	吉村　秀晴
〃	綿貫　富雄
羽生市	小倉　今朝巳
東松山	新井　徳治
羽生市	清水　栄

本庄市	茂木　勝
熊谷市	船田　栄
浦和市	黒澤　洋一
川口市	佐藤　公将
浦和市	関　謙司
北本市	岡田　功
蓮田市	山口　政志
川口市	尾熊　祐三
戸田市	細井　幹夫
鳩ヶ谷	林　博明
毛呂山	岩崎　恒雄
行田市	松岡　潔
嵐山町	馬場　恒次
東松山	神田　明雄
〃	市川　保
川口市	小図子　利行

鶴ヶ島	鹿川　久美男
北川辺	永塚　正夫
鴻巣市	村田　征二
飯能市	安藤　敏雄
大宮市	川辺　武夫
与野市	柴崎　信之
大宮市	久下　良夫
三芳町	岡部　亮介
熊谷市	近藤　七郎
岩槻市	須賀　一男
大井町	西山　数明
吹上町	石川　泰通
北本市	見富　貢
大宮市	工藤　勝彦
宮代町	田中　弘次
岩槻市	石田　照男

鴻巣市	久保田　忠司	秩父市	斉藤　清	中央区		三笠会館総務部長	
大宮市	小島　武夫	長瀞町	小林　博	〃		〃 経理部長	
飯能市	真柄　勇	台東区	飯塚　由利	〃		〃 管理部長	
浦和市	岡部　政雄	深谷市	山口　平八	目黒区		若林　とく	
大宮市	平沼　一幸	名栗村	町田　英二 村議会議長	青梅市		小峰　久治	
〃	矢島　一男	〃	浅見　福太郎 副議長	〃		荒井　多一	
熊谷市	井田　四良夫	〃	岡部　恒治 議員	〃		青梅ガーデン支配人 橋本　寛一	
与野市	松本　功	〃	佐野　正助	〃		田中鉄工㈱ 専務取締役	
大宮市	矢島　忠男	〃	加藤　春松	〃		枝久保鶴四郎	
〃	横溝　喜久雄	〃	町田　兵太郎	〃		岡部　千三	
浦和市	栗田　一彦	〃	岡部　敏	東大和市		浜崎　国男	
宮代町	吉池　智	〃	町田　一男	中央区		西島　達夫	
大宮市	金子　行男	〃	浅見　康夫	〃		㈱ 渡辺商店	
皆野町	関根　誠一	〃	原田　久好	〃			
秩父市	西　文雄	〃	大久保　義雄	〃			
〃	岩川　英夫	〃	平沼　清儀	〃			

御申込順に掲載させて頂きました

寄進者芳名

敬称略

○ 本堂前大香炉

壱基　株式会社不二サッシュ工業
　　社長　佐野友二

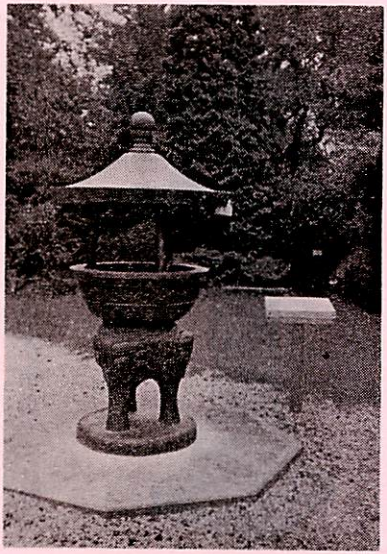
○ 納経塔内納経箱

拾箱　株式会社武州商事
　　社長　矢島武久

拾箱　株式会社富士倉庫運輸
　　社長　前田安彦

壱箱　東京　堀沢幸正

壱箱　飯能　関橋洋三



寺院用具・仏壇仏具
御宮神具
株式会社
浜田商店
東京都台東区寿二―一〇―九
電話（八四一）四九六五・四九六六・四九六七
（八四四）九四七三

寄進者芳名

敬称略

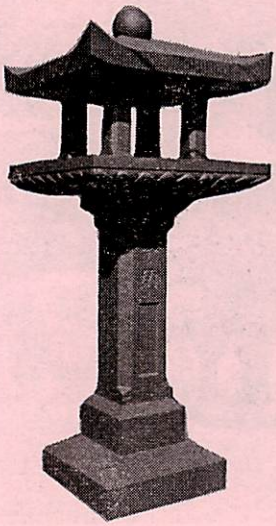
○境内大灯篭

壱基　所沢市　本橋俊男
壱基　所沢市　豊田れん
壱基　所沢市　見沢　孝
壱基　所沢市　沢田源一
壱基　所沢市　小山権之丞
弐基　世田谷　鈴木きせ
壱基　目黒　今井豊子
壱基　浦和　藤沢　帝

大灯籠寄進の勧進について

白雲山境内に、大灯籠三十数基の建立を計画いたしました処、すでに九基のご寄進がありました。灯籠は純すいの朝鮮式で高さ二・五米で評判が良い様です。

一基は十万円　何卒御協力御願い申上ます。



西遊記

（其の二四）

岡部千三

そうだ、そうだ、石の山だと云えばいいだろう。ほら穴も石、門も石、なんでも石だとこたえよう」

くるりとむきをかえて、法師のところへもどった

「おししょうさま、いってまいりました」

一足さきにもどっていた悟空は、これをきくと、くすくすわらいながら、「八戒、山は石の山、ほら穴も石で、門も石だったろうな」

「あれっ、きょうだいは、よく知っているな。それなら、おれのかんがえたのとおなじだよ」

「なまけ者め。おししょうさまをだます気か。わしはあぶになって、おまえの耳についていったのだ おまえのひとりごともこの耳ですっかりきいてしまったのだ、本当にわるいやつだ、ぶちのめすぞ」

「わあっ、そうだったのか、そりゃいけない。きょうだいゆるしてくれ、こんどこそほんとにいってくる」、と八戒は、かけだしていった。

すこしいくと、怪物の金角と銀角が、けらいを引きつれてくるのに出くわした。

見つけられては大変だ、八戒はつきでた口を着物でかくしながら、こそこそと通りすぎようとした。ところが、ゆだんのないあいては、ついに見やぶってしまった。

「あやしいやつだ、おまえは、三蔵法師のでしの猪八戒であろう」

銀角の太いうでで、ぐいとつかまれてしまった。こうなってしまっては仕方ない。

「おおっ、いかにも猪八戒よ、怪物め、この八戒さまの力を知らないか」とまぐわをふりまわして、

あいてにうちかかっていった。
「あははは、そうはいかぬぞ」
銀角は、ぱっと飛んだ、七星剣と云う剣のさやを払って、さっと切りこんできた。
二人はしばらくたたかっていたが、銀角はまけそうになると、けらい達を呼んだ。
「それ、みんなかかれ、ここにいるいのししのばけものを、ひっつかまえろ」「おう、おう」
けらい達は、へんな声を張り上げて、いちどに、どっとかかってきた。
「なにをっ」
八戒は、大ぜいを相手に、あばれまわったが、足もとにあった藤づるに足がからんで、ぱったりたおれてしまった。おりから怪物どもは、耳をひっぱりとがった口をおさえて、八戒をほら穴へかつぎこんでとびらをかたくしめてしまった。そこがれんげ洞だった。そのうらに大きな池があった。
「池へなげこんで、水でも、うんとごちそうしてやれ」金角がいいつけたので、けらい達は、八戒を、じゃぶんと、池になげこんでしまった。
「どうだい、あのすがたは。いくぢなし、あれでは、はいあがることもできまいのう」
「やわらかくなって、毛がぬけるまでまつとしょう。塩づけにすれば、上等な酒のさかなになるだろうよ、ははは」
金角と銀角は、たのしそうにわらっていた。
八戒は、池からはいでようとしたが、手足をしばられているから自由がきかない、でるどころか、どろがめのようになって、池の中でごろごろしていた。
「悟空のきょうだいよう、たすけてくれ」とどなった。

ふしぎなひょうたん

八戒をつかまえた金角と銀角は、こんどは、三蔵法師をとらえようとして、いまかいまかと法師のくるのをまっていた。
「きたっ、あれらしいぞ」と金角が、空をゆびさして云った。

美しい雲が、ゆらゆらと、静々流れながら、こちらに近づいてくる。

「あの雲の下に、法師がいるにそういない。銀角いってつかまえてこい」

「おう、すぐにつれてくるぞ」

銀角は、としよりの道士にばけた。道士とは立派な人になるために、くるしい修行をしている人のことである。足にけがをしたようなかっこうで、法師たちのとおる道ばたにたおれて、くるしげにうなっていた。

心のやさしい三蔵法師は、道士のそばへよって、

「どうなされたか？　みれば、おとしよりのごようすだが、けがをしてはおこまりでしょう。おお、血が流れている。おいたみでしょう」とやさしくことばをかけた。

「ごしんせつにありがとうございます。昨日のこと、でしと二人で、ここをあるいていますと、大とらがでてきて、でしはくわれ、わたしはどうやらたすかりましたが、このようなありさまです。わたしのすまいまでおつれくだされば、一生ご恩は忘れません」

「それは……わけのないこと　さあ、さいわいわたしの馬があります。おのりなさい。おくりましょう」

すると、道士ははずかしそうに云うのであった。

「せっかくですが、わたしは、馬にはのれないのです」

「それなら、わたしのせなかがいいでしょう」

悟空が、うしろむきになると、道士は悟空におぶさりながら、にやっとわらった。

山道を、しばらくあるいているうちに、三蔵法師と悟浄は、ずんずんいってしまい。悟空は、だいぶおくれていた。

「いまだ」と銀角は思い、なにやらじゅもんをとなえると、ごーっという音がして、須弥山という大きな山がとんできて、悟空のあたまにおちてきた。

「どっこい」

悟空は左のかたで須弥山をうけとめた。

ごーっ、二どめの音で、峨眉山がおちてきた。悟空は右のかたでうけ、三どめは、泰山のとんでくる音で、そのときはどうすることもできない。

「うーん」

悟空は、ついに、この泰山におしつぶされてしまった。

にせ道士の銀角は、つぶれないまほうを知っているから、もとの姿になって、すばやく悟空のせなかからとびおり、法師のあとを追いかけた。右手に法師を、左手に悟浄をつかみ、白馬を口にくわえてふりまわしながら、風にのってれんげ洞へとんでかえった。そして金角に云った。

「宝のひょうたんをだしてくれ。泰山におしたおされている悟空を、すいこませるのだ。おい、せいさいき。れいりちゅう。お前達、悟空をこれにいれてこい」

「はっ」

ふたりは、ひょうたんをもって、ほら穴をとびだしていった。

このひょうたんは、まほうのひょうたんで、名をよばれて、返事をすれば、中へすいこまれて、二、三時間でからだがとけて水になるという、まことにふしぎな力をもっているものだった。

悟空は、怪物たちがくる間に、ようやく正気になって、山の神を呼んだ。

「わしは斉天大聖孫悟空だ、三蔵法師さまのおともをして天竺へいくとちゅう、怪物のために、このありさまだ、おまえたち、わしに力をかして、この山をのぞいてくれ、怪物のみかたをする者は、あとで、おもいばつをかけてやるぞ」

「いえ、とんでもない、あんなわるいやつに、みかたなどしません」

山の神は、悟空にのしかかっていた。三つの山をとりのけた。

「やれやれ、これでらくになった。おまえたちははやくどこかにかくれろ。怪物どもがくるようだ」

悟空はひとりになると、からだをゆすり、としよりの道士のすがたになった。

以下次号

田舎医者（其の九）

見川鯛山

挿絵　おおば比呂司

ヒバリ

高原へ麦の海が果てしなく続き初夏の風がさわやかに流れると、若い穂が柔らかな波になって遠くまでゆれていった。

高く、点になってさえずっていたヒバリがすうーっと麦畑へおりた。その近くの巣にひなが生まれているのだ。

私は往診鞄をぶら下げて、泳ぐように麦畑へ分け入った。

はいながら近づいてゆくとそこだけ風が吹きぬけず、草いきれの麦が匂った。汗ばんだ首すじに、葉がさわってムズムズかゆい。

？……たしかにこの辺だったが、巣はなかった。

遠く牛がないた。蜜蜂が金色に羽を光らせ耳をかすめてゆく。どこかにまだ春の花が咲き残っているのだろう。

ヒバリはいつかふたたび舞い上がる。今度こそ、そこに巣があるはずだ。私は気ながに待つことにした。

ズボンと下着をずらして、お尻を出し、畑の畝にまたがってこごむと、顔だけが麦の上に出た。

銀色の太陽がまぶしい。目を閉じると、ものうい昼の麦畑で、私はそのまま眠ってしまいそうだった。

だれかの声がした。重いまぶたを持ち上げてソッちを見ると、道ばたに男が立っていた。

「やっぱり、あんた医者様だな。そこで何してるだ？」と、私の首に話しかけている。

「いや、なんでもない」

「だっておめえ、おれ来たらあんた居眠りしてた。そんなとこさ腰下ろして、クソでもたれてるのかね」
と、大きな声で云う。
「いや、私はヒバリの巣をさがしているだけだ」
「ヒバリだと？　ヒバリそこさ下りただかね？　でもそこにァいねえな。あいつはりこうなやつだ。巣よりずっと遠くさおりるだ」
「ほう」
「ンだとも。しかも、あんまり奥の方じァねえだ。巣は道端に近えだ。人の歩く近くだと蛇が寄つかねえの知ってるだな」
「じァ、人に取られる」
「人は取んねえだ。普通の人はな。あんたつかまえて、どうする気だね？……食うか」
「食わないな。私は巣を見るだけだ」
「つまんねえもん見たがるだな。でもおれ、めっけて手伝うべか？」
と、男がこっちへやってくる。歩くと体が左右にゆれた。片方の足が曲がって、ひどいびっこなのだ。
「あんまりそばへくるな」
私はあわてて少し尻ごみした。
「ほう、やっぱり野グソか。医者様でもたれるだな」
と、もう私のそばに立っている。
私はそっぽを向き、ずり下げたズボンの窮屈なポケットから煙草をとって、一本くわえた。
男がきいた。
「あんた、ずっとここさ居ただべ。この辺でだれか見なかったか？」
「見ない」
「そうかね。変てこだ……」
と、男は長い方の足でのびあがり、あたりをキョロキョロ見回している。
「どうかしたのか？」
「いやなんでもねえ。ただ……」
「だれかをさがしてるのか？」
「かかあことだ」
「おかみさん？」

「ンだ。この辺だと思って来てみただが……。おれあっちの方さ行ってみる」
男の短い曲がった足が、乾いた土につまずきながら歩きだした。
「ちょっと。マッチ持ってないか?」
呼びとめると、
「マッチねえな。おれ煙草やんねえだ」
「紙は?」
「拭くやつか? 紙だら持ってる」
男がふところの中でゴソゴソやりながら、古新聞をちぎって私にくれた。
「おれ、来ねかったらどうする気だべこの人」
男が初めて笑った。その足のようにみにくい顔が、笑うと無邪気だった。
「おかみさんが来たら、あんたがさがしてたって伝言してやる!!」
男はふりむいて、麦の向うでポクリと頭を下げた。
また一人になれた。時おり涼しい風が顔をなでて通った。
とつぜん、ヒバリがとび立った。
「いた!!」
私が声をだしたら、すぐそばで麦が不自然にゆれた。? 中腰でそこをのぞくと、そこにも尻があった。白く丸い、私のより大きな尻が、麦の中をノコノコと這って逃げていくのだ。
女だ!! 私がすっかり立ち上がって、口を開けたまま見ると、今度はもう一つの速い麦の波が反対の方へゆれ、色黒い別の尻が葉がくれにチラチラ見えた。
「だれ?」
声をかけると、麦の動きが止まった。二つの尻がふたたび息を殺してかくれたのだ。
中空で、さっきのヒバリがやかましく鳴きだした
私はもう、巣をあきらめることにした。向うの二つの尻は、私には関係がないのだ。
だから自分の尻だけ始末して、私は大いそぎでズボンをはいた。

赤い三角布

新生の空袋をひねって屑かごへ捨てると、すかさず直二がポケットからピースを出して一本くれた。

「すまないな。ピースとは豪勢じゃないか」

礼を云うと

「なあに、パチンコでね」

と、彼はもうライターに火をつけて待っている。ホテルのボーイみたいな早業だ。

直二は大百姓の次男坊である。男っぷりがよくすぎて役者のようにしなやかだ。彼は歌もうまいし、ギターも弾ける。村の花形で、その上独身なのだ。うちの看護婦のイネちゃんも、彼がくるとそわそわしだす。

直二は、シャツもズボンも、何枚も持ってるらしく、ここへくるたびとり替えている。しかも、アイロンがぴんとかかって、洋服売場の人形のようにスマートだ。そして、髪の毛と顔に、なにか塗りつけてあるので、彼が入ってくると、私の診察室は、いつも、デパートみたいにはなやかに匂う。

「イネちゃん、これ食べる?」

直二は看護婦にも、チョコレートをくれる。これもどうせパチンコだろう。

彼が怪我をしたのは、かれこれふた月前のことであった。

その日、直二の乗った新品のオートバイが菜の花と、れんげそうの咲き乱れる春の野道を、風を切って走っていった。彼の真っ白い絹のマフラーが、蝶のようにひらひらはためき、甘い花の香りの田圃で踊った。

その道を、お針に通う娘たちが歩るいていた。彼女たちは、遠くから直二のオートバイを見つけ、れんげ畑に身をよけながら、手をふってさわいだ。すると直二が、ハンドルから両手を離し、道端の恋人達にキッスを投げた。

以下次号

鳥居観音だより

○ 秋の行事と往来其他

九月彼岸会、当山の由来記（パンフレット）三万枚が、東京福徴講々元新妻治郎様から奉納されました。

鳥居観音の由来記

白雲山鳥居観音は、名栗渓谷の上流に位し、日本有数の西川林業地の一部、金比羅山の中腹に建立されたのが、昭和十五年でありました。

創設者平沼弥太郎先生は、この地に生を享けて、亡母志げ女の並々ならぬ観音信仰の心を継いで、数多くの観音像を自らの手で刻まれて、これを供養し亡母に孝養を捧げられたのであります。

意を決するや、山男姿の先生は自ら鎌を、鍬を、そして鉈を手に白雲山十万坪（三十万平方米）の広大な聖域に魂と汗の限りを投入して築かれたのです。

それも全く多忙の寸暇をさいての奮闘ぶりでした

銀行の経営に、林業の発展に先生の遠大な計画と施策は、日本林業界の師範として主をなし、今日の林業発展に寄与された功績は又大なるものがあります。

先生がこの入魂の地に、観音堂を建立されて以来日に月に休む暇なく、山の開墾に、仏像の彫刻にと努力は続けられました。夫人とみ子女史は、夫のこの一大事業に片身となって奉仕し、よく夫君と共に印度に渡って、仏像や彫刻の研究に助手の役目を果されました。

数多くの公職にありながら、三十余年間たゆまず積極的に進められたこの大偉業には、まったく頭がさがる思いです。

埼玉銀行の本店は勿論各支店に鎮座する大黒天の数々は、頭取であった先生の銀行への愛着と御取引を頂く多くのお得意様への感謝の印だったのです。

鳥居観音は本堂、鳥居文庫、子育地蔵、仁王門、玄奘三蔵塔、救世大観音（堂内に多数の彫刻あり）納経塔と三十余年の短日時によくもこんなに沢山完

成せられたものかと、まさに観音妙智力と驚きの外はありません。

先生は八十余歳のご高令ですが、その動作に於ては、年令を感じさせない敏捷さがあります。ここまで続けられたのは亡母の加護かと思わずにはいられません。

拙ない一文ですが、皆さんに人の一心は岩をもつらぬく実例をこの浄地に見る事が出来るのを知って頂きたいものです。

縁結びの観音さんとして好評です。

本日はよくご参詣下さいまして、ありがとうございます。お知り合いの方々に是非共お話し下さって一人でも多くの方のご参詣をと、祈っております。

合　掌

東京　福徴講　敬白

「新妻講元さんは青年時代からよく名栗山峡に往来されて、平沼先生ご夫妻をその頃からよくご存じでした。それだけに鳥居観音に就てもおくわしく、講の結成も早くからなされた方です」

十月　十　日　白雲山紅葉まつり開始

水野梅暁老師の墓参にご養子の水野様来山

十月十九日　愛知県より大嶽正一様一行来山

十月二十二日　五日市町、鈴木嘉三様来山

十月二十四日　所沢小山様来山、写経五十巻納入

十月二十六日　入間郡連合婦人会研修会来山

十月二十七日　納経箱四十三箱塔内に搬入す

十月二十八日　満蒙開拓大和拓友会、黒田様一行二十名来山、当山につつじ苗五十本奉納さる

川越山崎嘉七様より納経式のために、盛り菓子のご納あり

十月二十六日　鳥居文庫の中にある数多い、文化財の中から次の品を埼玉県立博物館に今日から、来年の十月末日まで出品することになり、その移送が関係者によってなされた。

重要文化財　木彫　阿弥陀如来立像　一体

県指定文化財　木彫　持国天立像　一体

〃　木彫　多聞天立像　一体

博物館ではその翌日から公開されております。

十一月　一日　納経塔落慶並納経式執行
開　式　午前十一時
参列者　心経写経世話人並写経奉納者
施工者　三信工業株式会社

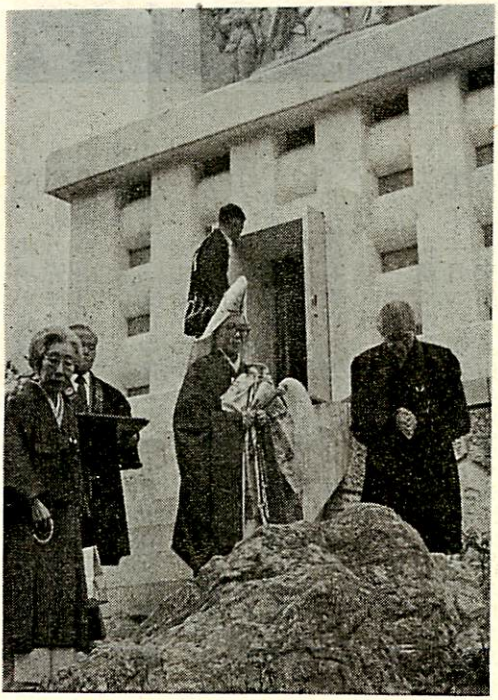
団体としては所沢の小山様の引率になる百二十名がバスをつらねて到着になった。

遠方からは、写経千数百巻を取扱われた。清水市の松田江畔先生が前夜からセンターにお泊りになって当日清水からの一行と共に参列の情景もあった。

式場への行列は、玄奘三蔵塔前から地元梅花流会員の御詠歌奉詠で先導、御導師小林老師、有馬、鯨井両師と、開祖平沼先生ご夫妻に続いて、写経者の列が納経塔へ続いた。

落慶成った納経塔を中央に、赤白に染め分けた提灯が四方に張られて、面白岩上の塔は、さんぜんと輝いていた。十一時塔内に於て落慶、納経、如来像開眼の式があって、読経のうちに焼香がなされた。それと同時に塔外でのご詠歌奉詠があって、式は終了した。

続いて、施工者、株式会社三信工業並に責任者に対し感謝状と記念品贈呈が贈られ、祝辞は来賓を代表して松田江畔先生に頂戴して、最後に開祖平沼先生から心からのごあいさつがあって一切の行事が終



了した。式場が高所で、又広場もないので四百名に及ぶ参列の皆様は随時中食をおとりになり、丁度見頃の紅葉を山内くまなく遊歩されて、心ゆくばかり探勝なさった。

十月三日　文化の日レジャーを求めて紅葉を探勝がてら、来山者が多かった。

十月八日　東京から、福徴講元新妻治郎様の一行二十名、江端政吉様一行二十名が来山、庫裡で休けい、食事、三観音、納経塔、玄奘三蔵塔の参拝をなさってから、山内の紅葉を遊歩道にしたがって下った。どなたも東京の方だけに、白雲山のきれいな光、空気、緑、水、には感心しておられた。

最後に、一同が本堂に入られて、小林老師の謹修による、祈禱に参列された。

十月十一日　紅葉の真盛り、三信工業株式会社の社員五十名来山、当山の各種建物に直接関係があるので特に関心をもって、一日をすごされた。

尚日曜だったので、ハイキングの人々が、非常に多く、しかも初めての人が入山した。

とりゐ　第二十九号　発行日　昭和四十九年一月一日
編集兼発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　岡部　千三
印刷所　浦和市仲町二―八―十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音電話〇四二九七〇四　名栗二七五番

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図

琴比羅神社
棒の峰
秋葉山
有間渓谷
納経塔
面白岩
三蔵塔
平和観音
白雲橋
見晴台
救世大観音
休憩所
大黒殿
自動車道
蛇の目型四阿
観音滝
子育地蔵
仁王門
トーテンポール
玉華門
梅月橋
梅鏡の墓
諏訪神社
稲荷神社
埴輪型四阿
炭谷川
庫裡
本堂
鳥居文庫
ますつり場
観世音センター
水泳場
鳥居観音入口
至秩父
至丸峠
至高崎
飯能
荒川
名栗川
大宮
青梅
川越
浦和
豊岡
拝島
所沢
川口
練馬
赤羽
八王子
立川
新宿
池袋

寅歳 新年祈禱会ご案内

○ 1月1日～3日　午前10時執行

願　　意　家内安全　交通安全　安産
　　各種試験合格　商売繁昌　その他

祈禱料　金 1,000円　金 2,000円　金 3,000円以上

受　　付　昭和48年12月28日迄

申　　込　埼玉県入間郡名栗村白雲山鳥居観音事務局

振　　込　埼玉銀行　名栗支店鳥居観音祈禱口座

尚祈禱は年間常時執行いたします。

春の花のお知らせ

○ 梅　祭　り　　3月20日～4月20日
　　境内……山麓と白雲山入口トーテンポール附近に見られます。

つつじ祭り　　4月1日～5月30日
　　山内全域にわたって展開します。

ふ じ 祭 り　　5月15日～5月31日

あじさい祭り　　6月1日～6月30日